もしれませんが、私は基本的には自然ゾーンにすべきだと思います。海岸とのバッファゾーン、または、河川とのバッファゾーン、あと森林の斜面とのバッファゾーン、そういうゾーンをありとあらゆる所にスイッチして、そこをみんなの身近な生活の場の自然体験の場にしていく。ゾーンで国土を造っていくということと、そのゾーンを子どもたちの自然体験をさせる場のバッファゾーンにしていくというのが、私の今の頭の中の究極的なユートピアなのですが。岐阜県の輪中地域というのがありますよね。ある意味では輪中のような集落です。

**【畑村】** おっしゃるとおりですね、全くそうです。自分たちでもう一つ自分たちの堤防というか。

**【竹村】** それを国家的なコンセンサスの上に、ある集落だけを守るのではなくて、この伊勢湾に大きな津波がきたらどうするのだと、高潮が来て海面が50センチ上がった時に、あの海岸堤防をあと、2メートル、3メートル上げるのかと、そういった議論になったときに、その時に土地利用をもう一回考えていこうよというのも僕はインフラ整備の一番大きなポイントになってくると思うのですけれども。

**【小出】** たとえば私たちが取材していて直感的に分かる事は、大災害というのは、中央集権は絶対だめですね。集中じゃなくて分散が一番効果的です。だから、その地域がどれだけいろいろな機能が分散しているか。何となく日本人というのは分散しているから非効率だとか、無駄だとか、これをどうまとめるかばかり、それはそろばん勘定に過ぎないのであって、やはり、現実の危機や災害というものには絶対に分散が強いという事は、いろいろな経験則でわかるのですが、この確かにこの海岸でのきのこみたいなのは、重厚長大な中央集権ではなくて、軽薄短小の分散型のその象徴のような気がしますけれども。

**【竹村】** そんな感じがしますね。

**【畑村】** 結局、一番強いのは、他との連絡を絶たれた時に、それぞれの場所が独立して、ちゃんと生きていけるのかという問題なのですね。そういう意味では、自分で自分の行動を決めることが出来て、それが分散系になっているという自律分散型というのをよく使うのですが。やはりそういう考えのものになっていないといけないのではないかという気がします。たとえば津波について見ると立派な防潮堤を造る、腕力で対抗するというような考えより、実際には10メートルも高い堤防を造るというのはほとんど無意味で、5メートルとか6メートルくらいのもので、それを超えてもみんなが助かるようなものを考えようじゃないかというのがたぶん本当なのではないかという気がします。ただ、この間、伊豆に行った時に漁港で、近所の人と話をしていたら、ここで5メートルの堤防ができたら船の出入りができなくなると言うのです。結局、防潮堤を造るという県の計画が来ても周りが全部反対するからずっと止まったままだと。だけど、それだといずれ伊豆半島には津波が来るという話をしたら、年寄りほど心配しているけれども、若い人なんか全然心配をしていないと。どうしてかと言うと、そんな事来るなんていうことを誰も考えていないよと。だったら、どこかで騒いでおかないといけないのではないかと話をしました。だから、5メートルで船が不便だというなら、5メートルか6メートルの所は何かできるような、ある種の工夫をしたうえでやはり、それより大きなものが来た時は、水は乗り越えるというような、それでも人が死なないというような、なんか少し2枚腰というか、そんな計画でないとちゃんといかないのではないかというような気がします。